

低い温度で高まる死亡率

がん社会 を診る

中川 恵一

一方で、03年に4万人に達した自殺者の数は2万2千人弱と半分程度に減りました。

ただ男性は13年ぶりの増加、女性性は3年連続の増加と、いまだ注意が必要です。がん患者の自殺は自殺者全体の約5%を占め、その7割以上ががん治療中のものです。

がんや自殺に季節要因はほとんどみられません。心筋梗塞、脳卒中（脑梗塞や脳内出血）、肺炎、老衰などは冬に多く、夏に少ないのが特徴

一年のなかで、日本人の死亡がもっとも多いのが、今の時期、1月です。
2022年に国内で死亡した日本人は156万人余りと、前年より9%近く増え、過去最多となりました。この20年で1.5倍に増えており、40年には170万人弱に達する見込みです。

死因別では「がん」がトップでおよそ38万6千人と全体の24%を占めています。ついで「心疾患」が14%、「老衰」が11%を占めます。

です。このため、月別死亡数では1月がトップになるわけです。

世界トップクラスの医学雑誌ランセットに15年に掲載された論文は、日本を含む13カ国を対象に気温が死亡数に与える影響を分析しています。

その結果、不適切な気温管理が死亡原因の8%弱を占めることが分かりました。

日本では低温が死因の9・8%を占めたのに対して、熱中症など高温による死亡は0・3%余りにすぎません。低温の影響は高温の30倍以上になるのです。年間の平均気温が約29度のタイでは低温が原因の死亡は3%もありませんが、国土の大部分が冷帯のスウェーデンでも3・6%にすぎません。

私もスイスに一年留学しましたが、冬でも家の中は暖かく、薄着で過ごせました。日

本でも北海道は断熱性の高い家屋が多く、冬と夏の死亡率の差は大きくありません。

もっとも、日本最古と言われる1910年の国勢調査では8月の死亡が最多でした。冷蔵庫がなかった時代、夏場は食物衛生が悪く、食中毒などが多かったためと思われる。ちなみに冷蔵庫はピロリ菌の感染率を下げ、胃がん患者の減少に一役買いました。

吉田兼好も徒然草のなかで「家の作りようは、夏をむねとすべし」と書いていて、当時としては正解だったかと思えます。しかし今は、冬でも暖かい家が求められていると言えるでしょう。電気料金の値上がりでエアコンの使用を控えている方も多いかもしれません。低温が日本人の死亡原因の1割近くを占めることを思うと、原発の再稼働の議論も必要かもしれません。

これからの家屋は「冬をむねとすべし」。能登半島地震の被災者も心配です。
(東京大学特任教授)

久美 中村

イラスト